

「アメリカの大学院での学生生活を振り返って」

この度は、私の退職にあたり、組合活動には貢献できなかった身としては、多額のご餞別をいただきましたことに恐縮致し感謝申し上げます。

退職後昔のことを振り返る中で、私の基盤ともいえるアメリカでの大学院生活について、せっかくこのような形で良い機会を与えられたと思い、簡単ですがまとめてみることにしました。



もうかれこれ 41 年前になりますが 1981 年 6 月 25 日、私は初めてアメリカの大学の地を踏みました。ニューヨーク州のイサカ (Ithaca) という 3 万人規模の小さな大学町に立地するコーネル大学 (Cornell University) のキャンパスでした。Cornell 大学の設立は専修大学より 12 年古く 1868 年で、連邦政府と州政府がともに設立に関わった上、同時に私立大学であるという特殊な大学で、Ivy League 校の一つです。指の形をしたといわれる Finger Lakes を見下ろす高台に位置し、キャンパス内に渓谷やゴルフコースがあるなど壮大な緑豊かな敷地に建つ総合大学です。

大都市 New York からジェット機に比べれば小さな蚊トンボのような 20 人程度しか乗れないセスナ機に乗り、ローカル空港に降り立ったのが夕刻前の時間で、閉まる前に大学の International Office へ行こうとタクシーを走らせたのでした。初めてアメリカの大学のキャンパスに滑り込むように踏み入れたちょうどその時、マッグロータワー (McGraw Tower) の鐘の音が響きだしました。胸に鳴り響くその鐘の音に耳を傾けながらキャンパスを見渡

すと、蔦で覆われた煉瓦の建物や広大な芝生を張り詰めた目の覚めるような美しいキャンパスにしばし圧倒されました。その瞬間アメリカの豊かさを実感いたしました。

そこから大学院での2年間の学生生活が始まったのですが、この2年間をサバイバルするためには最初に資金面でのサバイバルについてご説明しなければなりません。昔の小切手帳などを見ると、1981年の授業料(Tuition)とその他必要経費は4,700ドル(1ドル220円として約103万円)でした。これに、大学の家族寮費が2,500ドル(55万円)、子供の教育費、健康保険料、生活費を含めて合計で概算10,000ドル(220万円)はかかったと思います。これが2022年ではそれぞれ授業料など63,200ドル(1ドル130円として821万円)、寮費10,426ドル(135万円、独身用)、合計では少なくとも83,296ドル(1,083万円、子供の教育費は含まない)はかかりそうです。

あくまでもこれは一年間です。大学院は最初の2年間はHigh Tuitionでその後、安くなる(Low Tuition)ので、3年以降はだいぶ助かりますが、それでも相当な額になってしまいます。私は家計の助けとなるようにTAもやらせていただきました。当時は今よりはるかに、円安でしたが、それでも何とか自費でサバイバルできる額でしたが、現在では奨学金などを取得しないとかなり大変です。

現在日本でも在学中に借りた教育貸付金を返せない学生が増えていると聞きますが、アメリカでも、この問題は古くから言われております。しかも、最近の授業料と物価の高騰で就職後にもこれまで以上に多額の借金を背負うことになっております。そのため学生を支えるために、卒業生が個人的な基金を作って授業料の一部を奨学金として補助することが一般化しております。例えばMr. & Mrs. Peter Randelという基金は、ある地方の出身者の学生に対して個人の基金から毎年寄付をするものです。結果学生の多くは何らかの形で補助をもらっているようです。話は少しそれますが、一度San Franciscoから日本への飛行機の中で隣に座った方は、UCLAの医学部の教授でしたが、彼が学生時代に借りた借金を未だに返済し続けていると聞いてびっくりしたことを思い出します。

さて、大事な大学院生としてのサバイバルについて、お話いたします。どこのアメリカの大学でも大体同じようなシステムだと思えますが、最初はいわゆる必修の授業をクリアしてゆくこととなります。週3回の授業の場合は、2回は教授による授業、残り1回は毎週出される課題への回答でTAが担当することが多かったです。月に一度は試験もあり、必修授業を取り終わると、Qualify Examなどと言われる最終テストに合格する必要があります。そしてこの試験をすべてクリアするとようやくドクター論文の段階になります。この段階でMaster of Scienceをいただきました。

Cornell時代の思い出は実にたくさんありますが、中でも地域科学の指導的な役割を担ってきたWalter Isard教授に出会えたことは幸せでした。教授は忙しい方なので、金曜日に一回だけ3時間集中して授業を行います。耳がとても良い方で、時折学生に簡単な質問をされるのですが、私が小さな声で答えてしまった時も、くるりと私の方を振り返り、鋭い目で私の目を覗いて頷いていただけました。学期ごとに試験が終わると、一人一人呼ばれて、答

案と一緒に読みながら、授業内容を理解していたかどうか、確認していただきました。



Cornell University の 2 年間が終わり、そのままドクターコースを続けてもよかったのですが、さらにチャレンジする気持ちで 1983 年に Boston (より正しくは Cambridge) に移り、Harvard University に進学することにしました。最初は John F. Kennedy School of Government というケネディ行政学大学院でした。私が日本銀行に 7 年間勤務していたため、公共政策に広い意味で、携わっていたと見なされて入学を許可されました。経済学から、行政学、政治学などとても自由なカリキュラムで同じ Cambridge の MIT の授業を履修することもできました。ここでは海外で長い経験をお持ちの佐藤隆三教授の授業を取って親しくなり、ご自宅に呼ばれたりもしました。

自由な一年間で行政学の修士 (MPA) を取得した後、翌年からは日本からも紹介されてい

た社会学の Ezra Vogel 教授のもとで、Ph.D. コースに入ることになりました。教授は「Japan as Number 1」でよく知られており当時の日本社会の優れた特質を紹介し、アメリカ社会に大きな影響を与えておられました。Vogel 教授はキャンパスに隣接した自宅に多くの研究者、政財界の要人、そして学生らを招き、ノートを取りながらディスカッションするスタイルで幅広い見識と知識はそうした機会からも得られたものでした。また語学の達人でしたが常に日本語、中国語のレベルアップに力を注いでおられました。中国料理店に入れば、即座に中国語で店員さんと話し出していました。

学生の指導スタイルとしては、自分で研究できない学生は相手にしないという厳しいもので、何かを教えていただいたということより、幅広い人脈を紹介していただき、研究の糸口、機会を与えようという温かいまなざしと励ましを感じることができました。教授が一昨年他界されたことは残念でなりません。キャンパスを毎朝、奥様とご一緒に走っておられた元気なお姿を思い出しては心が痛み、心より哀悼の意を表したいと思います。

Harvard 大学の授業の方法はほかの大学と同じだったと思いますが、あらかじめシラバスで毎週の授業で読むべき論文、本が指定されているので、それらを必ず読んでくる必要があり、そうでないと授業のディスカッションには入れなくなります。必読の資料は図書館にあり、2時間の貸し出し時間内に読み終えて返却しなければならず、夜遅くまで図書館に通う日が続きました。今はネットの時代で、簡単にアクセスできるのではないかと思います。

このように当時を振り返ると、今とは隔世の感があるものの一つが情報処理レベルでした。当時はまだパソコンが普及し出したばかりで、Apple はまだ Apple II で Windows は出現しておらず、それ以前の MS DOS 上であり、ワープロ自体もまだ Microsoft Word がなく、Word Star など先駆的なソフトしかありませんでした。図書館に入って昔の博士論文を探すとタイプライターで打ったものに多くの訂正、切り貼りを加えて出来上がったもので先人の苦勞が偲ばれました。私ども外国の留学生は毎週の提出物を時間内に終えるのはアメリカ人の学生に比べ多くのハンディがあり、提出の期限の朝までにぎりぎり書き終えて最後にプリンターのスイッチを押してようやくほっとした次第です。

現在、資料はインターネット上で提供されていたり、資料一式を CD ROM で事前に提供されております。驚いたのは学部3、4年生と大学院の学生と一緒に受ける授業では、学部生も学会誌の最新のレベルの高い論文を読まされます。

大学院生にとって有益だったことは、大学の広い意味での優れた研究環境でした。毎日世界中から多くの研究者、政財界の要人が訪れ、様々な領域の研究会が開かれ、それらに参加して多くの知人と知見を得ることができました。アメリカのソフトパワーを提唱していた

Joseph Nye 教授、「文明の衝突」で知られた Samuel Phillips Huntington 教授、新古典総

合の Paul Anthony Samuelson 教授などのランチタイムセッションでの気さくなディスカッションや政財界の著名人を連日お呼びしての討論会への参加など刺激的な機会が多くあ

りました。この環境にいると自分の専門はもちろんのこと、興味があれば多くの専門外の分野の最先端分野に接することが出来ることは研究者としての幅を広げることになると感じました。また、アメリカの学生との話し合いは当然としても、日本から官庁、企業派遣で留学されている人と知り合う機会も持てました。さらに MIT、Boston University、Boston College、Tuft University などの大学群、古都 Boston の歴史、当時小澤征爾がマエストロだった Boston Symphony など文化的な環境に恵まれており貴重な体験を数々することが出来ました。

ここで Harvard の教授ではありませんが、私が大変お世話になった Boston College の John Fitzgerald 教授のことをご紹介させていただきます。英文学の教授で Boston 郊外の Millis という町で偶然出会って以来、長いお付き合いとなり、多くの励ましの後で、やっと書き上げた私の Ph.D.論文の英文の添削をしていただいた恩人の教授です。

教授が Fordham 大学の大学院生であった時、ある作家の評伝に関するドクター論文を長い間かけて書き上げたのです。そして、論文提出後最終ディフェンスに臨んだのです。学部長をはじめ英文科の諸先生、学生、さらには他大学から来られた先生の前で、自分の論文のディフェンス（質問に対して論文の正しさを自ら応答して守り抜くこと）の質疑応答を行っていました。手厳しい質問にしっかり答えていた時、学部長が最後の質問だとして、「ところで君はこの作品は読んだかね？」と彼に聞いたのです。もちろん Fitzgerald 教授のことですから、当然その作家の全作品を読破していたのでした。しかし、学部長が聞いた作品の名前はどこを探しても彼の脳裏には浮かんで来ません。読んでいない作品があったのかと頭が真っ白になってしまいました。この質問に答えられないとディフェンスは失敗となることを理解しました。しばし間が有った後、意を決して、しかし学部長の顔を見る勇気はなく、体を丸めながら

「私はその作品はまだ読んだことはありません…」と小さな消え入るような声で答えたのでした。

するとそこにいたすべての人たちが大爆笑をしたのです。Fitzgerald 教授は完全にディフェンスに失敗したと思い打ちひしがれました。しかし、学部長が彼の手を取って「おめでとう。合格ですよ。」と言ってくれたのです。Fitzgerald 教授は何が起きたかわかりませんでした。学部長は「その作品はごく最近発見されたもので、まだ誰も読んだことがないのだよ。」と笑顔で答えたのです。実は教室にいた彼を除く全員は最後の質問の意味を知っていたのでした。

彼が正直に、読んだことがないと答えたことで、彼の学問上の Honesty が証明され、彼の人生が救われたのでした。

Fitzgerald 教授からよく言われていたことは、「自分が日本から来た留学生の貴方を励まし英文添削などの援助をしたことに対して、私に礼を言うことはないのだよ。それより貴方が今度は日本に帰って留学生に対して同じように助けてやってください。」

この言葉がずっと頭に残っており、国際交流委員や、日本理解プログラムで 10 年以上

毎年留学生に英語で授業をする機会を喜んでやらせていただきました。

長い間のアメリカの大学院生活では、ここでは書き切れないことが多いのですが、思いつくままに私の実際の体験の一部を書いておくことにいたしました。

ご参考になったかどうかわかりませんが、お読みいただき、ありがとうございました。

これからは自由人となったので、在職時にやり残した日本の製造業、特にカメラ産業の競争力の研究を続けるのみならず、ここ10年近く続けてきた趣味のベルカント唱法の歌の世界も追求したいと考えております。歌を歌うことは、特にベルカント唱法で歌うことは、喉に負担をかけずに、前頭葉に声の振動で刺激を与え、健康で長生きする秘訣の一つであるようです。カンツォーネ、クラシック、ミュージカルから日本の歌まで幅広く歌っていきたいと思っております。出来れば近いうちにこれまでお世話になった人たちを御招待する形のソロコンサートを無謀にも考えております。

最後になりましたが、専修大学と教員組合の皆様の益々の発展を祈っております。

2022年6月7日

専修大学名誉教授 望月宏